

学術を核とした地方活性化の促進に関する検討委員会（第26期・第2回）
議事要旨

日時：令和7年2月28日（金）16:00～17:00

方式：オンライン会議（Zoom）

出席者：馬奈木 俊介、西川 正純、村山 美穂、三枝 信子、下條 真司、永井 由佳里、
西 弘嗣、加納 圭、田井 明、中澤 秀雄、那須 清吾、森本 淳子

【議事要旨】

委員会の意思の表出について、「学術を核とした地方活性化の促進という課題」での素案の説明が委員長から行われた。人口減少と超高齢化、一極集中を背景にした問題の所在および従来の政策効果を整理し、具体的な姿にまで踏み込んで取るべき施策を提言することが説明された。具体的には、①地方活性化を実現している好事例を収集整理、②共通する視点や課題、③地方活性化をより広範囲で促進する道筋の提案、効果的な政策である。

学術研究が問題解決の突破口となって産業育成とか地方創生に成果を上げている例を挙げて、実務に近い分野だけではなく学術研究の重要性を強調する。その中で①観光資源の開発、②地域問題の解決（自然編）、③地域問題の解決（産業編）、④地域問題の解決（社会問題編）、⑤大学との共同プロジェクトを推進、について事例報告や実証事業の学術分析を取りまとめることが提案された。

地域活性学会の過去3年間の論文集では、どちらかという事例報告とか実証事業の学術分析のものが多く、コンサルタント機能の一部を果たしているという事例が多い。委員会として、学術が中心となって課題解決を主導した事例、学術研究が直接的または積極的に地域創生政策に組み込まれてコンサルタント機能を果たしている事例を収集するべきである。地区会議ごとに網羅していきたい。

学術は部分的な分析や共有、人材育成への貢献もコンサルティングのプロセスの一部であり、個々の学術分野は各課題の理論構造を解明する上で貢献している。これらを統合して学術体系化することもコンサルタント機能を学術が果たす上で重要である。また、若手アカデミーでは、地域研究をする研究者を正統に評価するシステムも重要だと指摘している。

山形県鶴岡市のユネスコ食文化都市、兵庫県豊岡の人口問題指針など、優れた取り組みはあるが論文化されていない、論文化が難しいので把握できていない。これらを収集することを考える必要がある。大阪のスマートシティでハッカソンによりスタートアップ支援、産業創出につながる人材育成の観点も重要である。インパクトベースリサーチ、オリジナルリサーチが国際的なトレンドとしてもあるので、提言の

中に盛り込むべきである。

学術研究と地域貢献の成功例、学術研究を地域創生に活かすための問題点や予算とその効果的な配分、例えば地域活性学という学問体系の創造、地域研究をしている若手研究者の重要性も盛り込みたい。

各地区会議から事例を収集したいので、本委員会の各委員に依頼する。また、参考として地域活性学会の学会誌の過去17年分を委員会委員に限って閲覧できるように学会に依頼する。事例収集には、その概要、関与した組織、成果や問題点、意義・アピールポイントを記述して頂く。3月中に収集して、4月中旬ごろに第3回委員会を開催する。

【配布資料】

資料1：意思の表出の申出書（案）

資料2：学術が地域創生に貢献している事例